

エッセイ

奄美行

水野圭次郎　むぎのえいが部

7月中旬、奄美大島を訪れました。昨年からセントレア↓鹿児島↓奄美がスカイマーク便で結ばれ、片道一万円を切る値段で行けるようになりました。今回の旅の目的は唄者やミュージシャンの方々と会うことでしたが、思わぬところで映画やドラマとつながることになりました。

1日目の夜のライブ会場は用安海岸にあるパラダイスストアの庭で、そこには大きなガジュマルの木がありました。どこかで見覚えがあると思ったら、この木は河瀬直美監督の映画『2つ目の窓』に登場したガジュマルでした。用安海岸沿いの見晴らしの良い坂道も主人公が自転車で二人乗りをして下って行く坂道でした。河瀬監督は30代になって自身のルーツが奄美にあることを聞かされ、祖先はこの用安で島豆腐を作っていたそうです。それから約10年後、まるで導かれるようにその場所で映画を撮影することになりました。本作が初主演の村上虹郎君の母はミュ

ジシャンのUAで、やはり奄美にルーツがあります。まるで奄美の神が二人を呼んだような気がします。

2日目、奄美豎琴奏者の盛島貴男さんの自宅兼工房にお邪魔しました。奄美豎琴と言えば盲目の樂士里国隆さんが第一人者で、沖縄の路上で豎琴を弾きながら歌っているのを竹中芳さんが惚れ込み、一枚だけアルバムがレコーディングされています。そのアルバムは路上のブルースと評され、今でもコアな人気を誇っています。その里国隆さんに憧れ、自ら豎琴を製作し、弾き語りをしているのが盛島さんです。その豎琴の澄んだ音色とダミ声はNHKさんの大河ドラマ『西郷どん』奄美編の挿入歌にもなっています。盛島さんは独特の風貌とキャラクターから映画やテレビ出演のオファーが絶えず、最近ではNHK BSのドラマ『甲子園とオバーと爆弾なべ』で満島ひかりさんと共演しています。私が訪ねた前日には渡辺真也監督の『神の唄』で吟遊詩人役としてロケに参加していたそうです。『神の唄』は奄美シマ唄によって伝えられている奄美の神話と伝説を4部構成で映画化し、現在3部目を撮影中とのことでした。

3日目、奄美民謡大賞を最年少で受賞した唄者西和美さんの奄美郷土料理の店「かずみ」の35周年記念で「ありがっさまりよ唄」という盛大な感謝の宴に参加させてもらいました。この宴には奄美群島から名だたる若手唄者が集まりました。大河ドラマ『西郷どん』の主題歌を歌った里アンナさん、挿入歌を歌った前山真吾君、映画『神の唄』に関わった人たちも数多く出席していました。「かずみ」からは、元ちとせ、中孝介などの唄者が育っており、「奄美のおふくろさん」の店はシマ唄の発信基地となっていています。また、奄美で映画やドラマの撮影があると必ずと言って良いほど、関係者が立ち寄る場所になっており、店内の壁には監督や俳優が訪れた際の写真やサインが所狭しと並べられています。撮影中のロケ弁の依頼もよくあるようです。

奄美の認知度はまだまだ低く「奄美に行って来たよ」と言う「いいねえ沖繩」と返されることが多いです。しかし、奄美群島は鹿児島県なのです。また、シマ唄と言うと沖繩の琉球民謡を思い浮かべると思いますが、奄美シマ唄

は蛇皮の三味線を使うものの琉球音階ではなく日本音階を使い日本民謡の最南端と言われています。

奄美は神々の棲む島と呼ばれ、沖繩に引けを取らない豊かな自然と神への信仰、古い日本文化や古語が残されています。かつて薩摩、琉球、アメリカに占領された悲しい歴史もあります

が、映画のモチーフになりそうな話やロケが来そうな美しい風景には事欠きません。

また、美しい奄美を舞台にした映画を是非見たいと思います。



憤りと灯と

▼2019年3月某日の土曜の午後1時過ぎから4時近くまでの大阪発のNHK第一放送のキャスター、出演者は悲憤に満ちていた。関西弁も自由で長く続いた愛聴番組だが、東京の編成辺りがつぶしにかかったのか。とにかく事情説明は口に出せない形の最終回だった（700以上の投書が寄せられたとだけ最後にあったが）。▼一方で書店には出ない月刊誌「選択」6月号はNHK政治部が「政権広報機関」と化した件や、内部権力ほしいままの女性某にメスを向けた。そういえばこの4月の番組改変で朝の6時台から2時間、第一放送で「M某の真剣勝負」と軍国調に通じる音楽を伴う変なニュース系が登場（その中で女の気象予報士はDJ傾斜も果たしつつ）。アナウンス課長Mの特権が生んだとおぼしい毎朝の不快。猫などで声の面々でもある（当の主はLGBT番組のナレーションでは声の特性を生かしての拍手ものだが）。大阪局は改変に抵抗して

か、7時40分からの20分間は東京局の意向に従わない流儀。そんな意地もつぶしにかかるのでは。▼昼の0時半からも改変でつまらない。以前は全国各地をめぐる25分間。総じてローカル色一掃、中央一強化なのだ。ついでに記せばBSの映画番組もひどくなって数年。対米追従が9割方。溝口特集、成瀬特集などは過去の夢。凡作・愚作まで垂れ流す公共放送。大宅壮一の一億総白痴化まっしぐら。ソントクに加え白痴化の推進役。その辺にはもの申さないN国の登場。▼が、払わされるジェジュエコに値する数少ない例で、E TV特集の中には良心のカケラは残っている。広島市立基町高の美術部の活動記録60分などは秀逸。部員が被爆体験者から話を聞いて時間をかけて完成させていく絵の数々。顧問は映画『ひろしま』を見せたりも。再現であるとともに想像力との格闘を伴う創造が部員に見られた。ところで、愛知芸文センターで起きた件、「表現の不自由展」中止）E TVに限らず映像系はこの

際、どうとらえるのだろうか。▼地域で唯一の映画誌「シネマ游人」。県内での注目すべき催し類の記録をわずかの行数でも乗せたらどうか。例えば、この7月に2例あり。松阪で「世界のOZU」展。築山コレクションの海外ポスターが主だった。多度で3日間、昔の写真展。前号に登場した伊藤有紀が担い手で、地元の児童文学者、北村けんじ作品の映画化の準備の一環でもありそう。赴いた甲斐はあったように思われる。希望の灯も添えておきたい。

(A)



編集後記

■元代表の堀川が亡くなってから、早くも半年になります。今号から林が代表を引き継ぎ、編集責任者は村上が務めることになりました。これからも四日市発の硬軟併せ持つ面白い映画誌を目指して頑張りますのでよろしくお願いします。

編集部

■愛知トリエンナーレの企画展「表現の不自由展・その後」が開幕直後に中止された。彫刻家中垣克久氏の作品も展示されることだったので、とても楽しみにしていたのに……。映画『ハト』は泣いている。時代の肖像』は、表現の自由が侵される現在の状況に警鐘を鳴らしている。中垣氏の作品は東京都美術館で展示されていたが、右翼からの抗議、脅しを受け、館側が作品の撤去を要求した。氏の作品はその後、ベルリンの画廊に招聘され展示される。ドイツでは、いたるところでホロコーストに関する記念碑や説明文が見られる。同じ敗戦国でも、戦争中の自国の加害に対し、記憶にとどめ反省しようとする国と、忘れようとしている国とで、姿勢の違いがはつきりと表れていた。愛知トリエンナーレの企画展には、政治家からも圧力がかった。権力を使って自国の過去の過ちを覆い隠す。『新聞記者』でも描かれている、汚い手段を使う権力にノーを突き付けていかないと、この国の表現は自由になる。

村上

■今年の梅雨はよく降った。7月28日梅雨明け当日、夕刻から地元の中公園で富田自治体主催の納涼祭が催された。夏休みに入っても梅雨の雨にたたられ通しだった反動もあって、特別広くもない公園は地元・近隣の住民で足の踏み場もない大賑わい。特にこんな時代、人は集まり群れて開放的気分を楽しみたいのだ。真ん中の盆踊り櫓を囲んだ10張りほどの地元民テント店舗には長蛇の列ができ、みんな表情がゆるんでみえる。夏のまつりの始まりを楽しみに待っていたことが感じられる。わたしも自治会活動2年目だ。大勢集まって、嬉しそうな顔をみれるのはいいものだ。8月お盆の夏まつり、9月末の地区総合体育祭とこれから富田のまつりも本番。どうか良いお天気に恵まれる様祈りたい。

中村

■元来の健康オタクである。今春に小誌の代表、堀川が亡くなり、さらに健康志向が高まっている。昨年の2月からジム通いが始まり、ほぼ毎日2時間ほどウォーキング、腹筋など年令に合わせた重量の筋トレに励んでいる。元々健康体ではあるが、さらに磨きがかかってきている。運動後に体年令を測ると67歳にして53歳である。さらに細胞を修復させるために『食べない時間を増やす』を目標にして、8月から一日2食を実践したら体年令が49歳を更新した。ずぼらな私にとって、これほど簡単な食事法はありがたいことだ

ある。一説によると、まとまった空腹の時間を作る
と、食べすぎがもたらす害が取り除かれ、加齢や食生活によるダメージがリセットできて、体が内側から若々しく蘇るそう。この分だと、堀川のところへはまだまだ逝けそうにもない(笑)

森

■地元地区で「百人一首大会」をやるといふ。こんな田舎でシャレタことをやるもんだと感心しながら……ボケ防止に一つ参加してみるかと腰を上げる。まあ、数枚取ればいだろうと思っていた。当日O中学校の体育館の畳の上に集まった顔ぶれで、言われて気が付いたが私が最高齢。相手は中学生や高校生が中心で大人は1〜2割といったところか。
6人一組で7〜8組に分かれ扇状にまかれた札取りが始まる。何と一回戦は私が40札ほど取って勝ったのだ。小学校時代の正月に母の読み手で家族とやって以来なのに、よくも覚えていたんだと我ながら感心。続く二回戦、ところが今度は中一の女の子にペンペンにやられてしまう。結局10札しか取れなかった。目の前の札を次々に取られる。さすがにムーとして彼女の前に置いてある札を取ってやろうと思ったが不発に終わる。後で聞くと彼女全国大会に挑戦するという。しかし実に爽やかなカルタ取りだった。来年もやるといふ。まだまだくたばってはおれん。闘うぞ！ 林